

平成27年度
宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、板書されている時間割のと通りの50分間です。
- 3 問題数は大きな問題が4問で、表紙を除いて10ページです。〔四〕は記述問題です。
- 4 解答用紙は2枚で、答え方はマークシート方式と記述式です。
- 5 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名をマークシート解答用紙のきめられた欄に書き、さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。
- 6 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名を記述用解答用紙のきめられた欄に書き、さらにバーコードシールをきめられた枠の中に貼りなさい。
- 7 答えは、それぞれの解答用紙に記載されている注意事項にしたがって、ていねいに記入しなさい。
- 8 試験中に質問があれば、手をあげて監督者に聞きなさい。
- 9 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおきなさい。

— 1 —
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

1 今、最も森をつくらなければならぬ場所は、山地ではなく、人口が集中している都市です。戦後の都市づくりは、山を削り、谷や海を埋め立てた造成地に、鉄やコンクリート、石油化学製品など人工的な材料で画一的に構造物をつくることでした。そして同時に、周辺に住宅地域、さらに産業立地もつくってきました。

2 最近では東京港区の汐留、東京駅周辺、大阪梅田駅周辺、横浜みなとみらい21地区などを見ればわかるように、限られたスペースでより多くの人が効率的に働き、便利な生活を **A** しようとするば、「空間」は空に伸びるより他ありません。

3 国土の狭い日本では、より立体的に建造物をつくることが新都市建設のシンボルのように考えられ、沖積低地の埋め立て地に超高層ビルが出現しています。(a) 比較的最近までは、頻発する地震で倒壊する危険性があるため、高層建造物を造ることはある程度、抑えられていました。わが国の建築高度規制は、一九七〇年まで、建築基準法に基づいて、住宅地域で二十メートル、その他は三十メートルまで決められていたのです。(b)、自治体の許可があれば「この限りでない」という例外規定があり、霞が関ビルなどがこれに該当しました。七一年に国の高度規制はすべて撤廃され、各自自治体の **B** にゆだねられました。現在では建築技術も進み、絶対安全であるという思い込みもあつて、三十〜五十階以

上の高層ビルが、主要都市の中心部で競うように建てられています。

4 オフィスビルや商業施設だけでなく、マンションなども高層化しています。少し前までは、満員電車で揺られても自然あふれる田園景観の中に住みたいという人たちが比較的多く、住宅は郊外へと広がっていました。しかし最近では、都心の土地価格も一時ほどではなくなりました。① 都市部に住みたいという願望が強くなっているようです。子供も独立し、仕事も退職した夫婦が、郊外の大きな家を売却し、買い物に便利で、文化的な催事も多い都心に引越す例も少なくありません。

5 かつてせいぜい十階、二十階であつた集合住宅も、今や三十階、五十階、(c) それ以上になり、東京ですと中央区や江東区などの埋め立て地で、マンションの建築ラッシュが続いています。
6 たしかに、周りを俯瞰できるような超高層ビルで働いたり生活したりすることは、下界を睥睨する気分^{注3}で、多少の「優越感」と「満足感」を得られるかもしれません。しかし、高層マンションを末代まで永住する場所と考えていたとしても、五年、十年と生活していたら、果たしてどう感じるのでしょうか。職場も近くの超高層ビル内という生活を続けていると、(d) それがどんなに効率的で、経済的で、格好よくても、鉄とコンクリート、ガラス、石油化学製品など人工材料でできた建造物の中での生活には、生物として

本能的に「息苦しさ」や「ストレス」を感じないでしょうか。多少不便でも、時に葉が落ちることがあっても、生きた緑がほしくなってくるのではないのでしょうか。

7 同時に、高層ビルでは、地震やそれに伴う大火によって、いのかにかかわる重大な被害を受けかねません。「Ⅰ」もちろん、耐震構造、防火扉、非常階段、エレベーターが止まった時の措置など、現在想定できる範囲で、さまざまな対応が考えられているでしょう。

「Ⅱ」

8 現在計画中の開発区域や、建設が進められている高層ビル周辺に、樹木の植栽が計画されているケースも多いことは確かです。しかしそれらは、単なる美化的、装飾的緑化がほとんどです。また、大都市のみならず中小の都市や町でも、土地面積が限られているため中心部に緑を植えることは不可能とされている場合が多いようです。「Ⅲ」大都市にも、平時なら車で二十〜三十分、歩いて一、二時間ほどのところに小公園、城跡などの緑地があります。しかしその大部分は、毎年、多額の管理費をかけて維持されている、芝生が敷きつめられ外来種がまばらに体裁よく植樹された見かけだけの緑化です。

9 都市にこそ、肉体的な健康のためだけでなく知性や感性、明日に向かって発展する知的エネルギーの源として、本物の緑の環境が必要なのです。生理学、医学、心理学、さらに^(注4)エコロジカルな立場から長期的視野で見ると、現在は肯定されている超高層ビルの生活を、いつまでも続けることが可能であるとは思えません。

10 われわれ人間は、三十数億年というとても長い時間をかけてゆっくりと進化しながら、生物学的には異常ともいえる大きな脳を持つに至りました。そしてこの数十年、長くみても数百年の極めて短い期間に、新しい科学・技術を飛躍的に発展させました。「Ⅳ」その現代のウルトラ新技術を駆使してつくった画一的で無機質な空間に即座に適應できるほど、生物としての人間は短い時間で進化する力をもつていません。心身ともに豊かな生活環境を持続的に保障するためには、人工的な材料で造られた環境と、最低限共生できる程度の「本物の緑環境」が必要です。モダンな都市計画、建築計画の中にこそ、思い切って本物の森づくりを取り入れるべきです。

(宮脇昭「木を植えよ!」から)

(注1) 沖積低地^{ちゅうせきてい} 流れにより土砂などが積み重なった低地

(注2) 俯瞰^{ふかん} 高いところから見渡すこと

(注3) 睥睨^{へいげい} 見下げること

(注4) エコロジカルな生態学的な

問一 **A**、**B**に入れる語の組み合わせとして適当なものは

どれか。

- ア [A] 拒否 B 判断 []
- イ [A] 受容 B 推測 []
- ウ [A] 維持 B 賛成 []
- エ [A] 享受 B 裁量 []

問二 (a) から (d) に入る語の組み合わせと

して適当なものはどれか。

- ア [a] あるいは b たとえ c しかし d ただし []
- イ [a] たとえ b しかし c ただし d あるいは []
- ウ [a] しかし b ただし c あるいは d たとえ []
- エ [a] ただし b あるいは c たとえ d しかし []

問三 都市部に……強くなっているようです。とあるが、その理由として適当でないものはどれか。

- ア 現在の建築技術は絶対安全だと思いついでいるから
- イ 田園景観の中に住みたいと思わなくなったから
- ウ 都心の土地価格も一時ほどではなくなったから
- エ 買い物に便利で文化的な催事も多いから

問四 果たしてどう感じるのでしょうか。とあるが、人々は今後何を「感じる」と筆者は予想しているか。適当なものを次から選べ。

- ア 多少の「優越感」と「満足感」
- イ 本能的な「息苦しさ」や「ストレス」
- ウ 本心に永住できるのかという不安
- エ 効率的で経済的だという便利さ

問五 次の一文が入るところは、本文中の「Ⅰ」から「Ⅳ」のどこか。適当なものを後から選べ。

しかし実際に大きな自然災害が生じた場合、はたして計算通りに作動すると、誰が保証できるでしょうか。

- ア「Ⅰ」 イ「Ⅱ」 ウ「Ⅲ」 エ「Ⅳ」

問六 高層ビル周辺に、……確かです。とあるが、ここでいう「計画」の説明として適当なものはどれか。

- ア 装飾的であつてもとりあえずの緑化を進める。
- イ 中心部には緑を植えない。
- ウ 比較的近くにある小公園や城跡などの緑地を利用する。
- エ 芝生を敷きつめ、外来種をまばらに植樹する。

問七 ④ いつまでも……思えません。とあるが、その理由として適

当なものほどれか。

ア われわれ人間は極めて短い期間に脳を進化させて科学や技術を発展させたから

イ 流行を追っただけの超高層ビルでの生活に、人々は飽きてくると予想されるから

ウ 人間は、画一的で無機的空間に即座に対応できる力を持っていないから

エ 都市計画や建築計画には本物の森づくりを取り入れるべきであるから

問九 本文中で述べられている内容として適当でないものはどれか。

ア 生物としての人間は、技術を駆使した空間に即座に適応できるほど短い時間に進化する力を持っていない。

イ 心身ともに豊かな生活環境を持続的に保証するためには、人工的な材料で造られた環境のみが必要である。

ウ 最も森をつくらなければならない場所は、山地ではなくて人口が集中している都市である。

エ われわれ人間は、とてつもない時間をかけてゆっくり進化しながら大きな脳をもつようになった。

問八 本文を段落分けしたものとして適当なものほどれか。

ア	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
イ	2	2	3	6	2	2	3	6	2	2	3
ウ	3	3	4	5	4	5	5	8	3	3	4
エ	4	4	5	8	5	6	6	9	4	5	5
	5	5	6	9	6	9	8	10	5	6	6
	6	6	7	10	7	10	9	11	6	7	7
	7	7	8	11	8	11	11		7	8	8
	8	8	9		9				8	9	9
	9	9							9		
	10	10							10		
	11	11							11		

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

① ひな祭りを数日後にひかえ、人形のはいった箱がいくつも土蔵からはこびだされた。やわらかい和紙でくるんだ人形を祖母はとりだし、その紙をのける。頭にそえた綿をとり、そつと髪をなぜつける。母がひな壇をくみため、緋（注1）もうせんを敷きかけた。髪やら着ものを整えるとばあちゃんは、その人形を母にわたす。床の間を背にしたまつ赤な壇に、しだいに人形が並んでいく。ケンよりも三つ歳（注2）うえの姉が、祖母のまぢかに坐すわり、ぼんぼりを楽しそうにいじる。

① なぜか彼はおもしろくなかった。タカばあちゃんたちは、ひなさまを飾るのに夢中になっている。とくに祖母は、長女の姉のことになると顔つきが変わる。きようは母までが、ばあちゃんとおなじようにふるまう。さつき、おれが小遣いを催促すると母は、いま忙しいの、あとでやるから、といってそれきりだ。おれのことなどすっかり忘れている。

ふつと彼は、さびしいような、ちよつと腹だたしいような、入り組んだきもちになった。はじめ、それは胸の内にかすかに芽生えたのであるが、三人のようすをながめていると、しだいに熱いかたまりとなった。

ひなさまを飾った部屋をケンは後にした。広縁ひろえんにみかげ石の大きな沓脱くつぬぎがあり、そのうえの下駄げたを突つかけたとき、胸にわだかまるものがぐつとふくらんだ。彼はひな壇のところに戻った。あでや

かな人形をみまわし、やおら内裏だいらさまの手から笏しやくを抜きとった。ぽきつと二つに折る。その半分を内裏びなの手にさし、残りをもって庭にでると植え込みに放った。なにくわぬ顔でケンが遊びから帰ったとき、ものさしを手にした祖母が待ちかまえていた。

「おまえだね、ひなさまにいたずらしたんは」

「おれじゃね、知らねよ」

「うそつくんじゃない。こんなことやるんは、おまえしかいない。さ、あやまりな」

内心ケンは、いい気味だとおもった。それを察して祖母が、いっそうきついことばをなげつけた。

② こんな寒いのに素足で歩きまわって、みつともないよ、と祖母がいった。おれ寒くなんかね、そうケンは **A** をはった。陽ひのあたる部屋でいつもばあちゃんは針を使う。色とりどりのまち針が、布ボールのような針坊主はりぼうずに突きささっていた。針をはこびながら、ときどき手をとめ、（ a ）針さきを髪になぜつける。ケンにむかって彼女は、まったくあきれたこだ、と **B** 顔を

紺もめんの木綿でタカは小さなたびをつくった。それをはくとケンは、足がきゆうくつでたまらない。素足はみつともない、と彼女も母もいうが、空つ風の吹きすさぶ真冬でも素足で遊びまわった。

足の親ゆびに、おおきなあかぎれができた。ぱっくりとあいた割れめに血がにじむ。子守りのミツちゃんが、貝がらにはいった膏藥（注2）

を火であたためた。まつ黒なあかぎれ膏を、その割れめにすり込んだ。とびあがるほど痛い。ケンが手あてをうけたのは一、二度で、その後ミツちゃんが見がらを手にすると、すばやく逃げた。「Ⅰ」

3 「もつと飲むかあ、ばあちゃん」

吸い呑み(注3)をもちかえてケンは祖母に声をかけた。かすかに目がうごく。そつとケンは吸い呑みをちかづけた。お茶を飲みつつ彼女の目にまた涙があふれた。よく梅干しが貼はられたこめかみを、すすつと涙がつたい落ちる。祖母にみいつてケンは、ばあちゃんはこんなに小さかったのか、とふしぎな気がした。父や母よりもずつと歳上であり、だから体もおおきい、そう漠然とおもっていた。けれど寝ついてから祖母は、みるみる体がしぼみ、乾いた木ぎれを床に置いたようだ。これは祖母ではない、もつとばあちゃんはそのもしいはずだ。「Ⅱ」

4 祖母の袖そでをケンはぎゅつと握り、体がこわばった。汗とあかの臭いにかこまれる。どなり声がとびかう。つぎはぎだらけの服をきた大人、人また人で数歩さきが見えない。そんな上野駅にケンと祖母はおりたつた。ばくげきで屋根は吹きとび、ひしゃげた鉄骨がまうえの空に突きささっていた。「Ⅲ」

会社づとめをする母の兄が焼津で暮らしており、祖母はケンをつれて海のある町にむかつたのである。それまで彼にとつて、母の生家がある桐生の町なか、大日さまのある足利の町なか、ともに八キロに満たないところが、いちばん遠い場所だつた。しかし焼津は、なんども汽車をのりかえ、気が遠くなるほど列車にゆられねばなら

なかつた。

のりかえの切符を買うため祖母とケンは、列にならんだ。が、まわりは人の波で、どこまでが列なのか区別がつかない。しかも列のすすみぐあいは遅々としていた。祖母にかまるケンは、しだいに疲れた。ときどき、こくんと頭がさがる。そのたびに、(b) われに返つて袖を握りなおす。しばらくたつて袖を握ろうとした折、ケンの手がじゃけんに払われた。みあげると別の人だつた。彼は一瞬、すつと体じゅうの血がひいた。(c) 涙がわき、目がかすんだ。なぜかわからぬが改札口に戻ろうとした。押され、こづかれ、もまれて、ひつしにすすむと、(d) 祖母にでくわし、夢中ですがりついた。彼女はケンの背中をぼんぼん軽くたたき、祖母にしがみついて彼は、屋敷にそびえるケヤキの大木に抱かれていますように感じた。

5 「ばあちゃんが死んだどう」

裏山のふもとでケンが遊んでいると、クメさんがかけつけて告げた。祖母が寝ついて一年後のことである。

葬式を手つだいに近所のものが集まつた。ケンの知らない親戚しんせきの人がたくさんやつてきた。下職(注4)やら町の間屋とんやなど、織ものにかかわる多くの人が集まつた。ごつたがえした家は、まるでお祭りのようだ。ばあちゃんが亡なくなったことがケンにはぴんとこない。「Ⅳ」

6 とむらいの数日がまたたくまにすぎた。「がさこそ、なにをやっているの」と母がいった。ケンはこども筆筒だんすの引き出しを掻きまわしていた。

「ブリキの自動車、めつけてるんだ」

「まあ、そんなところにしまっておくなんて……」

じつは彼がさがすのは、木綿の小さなたびだった。三段めの引き出しに、その紺色のたびがあった。

たびをもってケンはずは土蔵にはいった。急な階段をあがると、明かりとりの窓がある。そのしたに腰をおろし、たびに足をいれた。洗ったまま箆筒にしまった木綿のたびは、きつい。すこし親ゆびが痛んだけれど彼は、ぎゅつとコハゼをとめた。

(大屋建一「むかしの少年も闘っていた」から)

(注1) 緋ひもうせん二赤い色をした敷物用の毛織物

(注2) 膏藥こうやくぬりぐすり

(注3) 吸い呑みすいのみ吸い口をつけた病人用の容器

(注4) 下職したしやく下うけ職人

(注5) コハゼ二たびに付いている、つめ形の留め金

問一 ① なぜか彼はおもしろくなかった。とあるが、その理由として

適当なものはどれか。

ア 皆がひな壇を飾ることに夢中になっていて、自分のことを気にかけてくれないから

イ 祖母と遊びたいのに、姉がその邪魔をするかのように座って

いるから

ウ 自分もひな壇を飾りたいのに、仲間に入れてもらえそうもないから

エ いつも自分の味方をしてくれる母が、祖母のように冷たい態度で自分に接するから

問二

A

B

ものはどれか。

に入る語の組み合わせとして正しい

ア 「A 胸

B 渋い

イ 「A 面

B 赤い

ウ 「A 意地

B 青い

エ 「A 見栄

B 甘い

問三

(a) から (d) に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア 「a ぱつと

b すつと

c はつと

d ぼわつと

イ 「a すつと

b ぼわつと

c ぱつと

d はつと

ウ 「a すつと

b はつと

c ぼわつと

d ぱつと

エ 「a ぱつと

b はつと

c すつと

d ぼわつと

問四

次の一文が入るところは、本文中の「 I 」から「 IV 」のどこか。適当なものを後から選べ。

まだ祖母の声がかきこえるような気がした。

ア「Ⅰ」イ「Ⅱ」ウ「Ⅲ」エ「Ⅳ」

問五 ② 祖母にみいって……ふしぎな気がした。とあるが、その時の「ケン」の様子として最も適当なものはどれか。

- ア 祖母の命は長くないと確信して落胆している。
- イ 祖母が衰弱しているという現実を受け入れられずにいる。
- ウ 祖母の病状が想像以上に悪くて驚いている。
- エ 祖母がなぜ涙を流すのかが分からずに戸惑っている。

問六 本文中の③の段落よりも、時間的に前の場面となっている段落をすべて選んだものとして適当なものはどれか。

- ア「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」イ「Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ」
- ウ「Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ」エ「Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ」

問七 ③ 祖母の袖をケンはぎゅっと握り、体がこわばった。とあるが、その理由として適当なものはどれか。

- ア 長い時間汽車に乗り続けて疲れてしまったから
- イ 初めて来た上野駅の雑然とした雰囲気に緊張したから
- ウ 切符を買うまでの時間が長くて飽きてしまったから
- エ 祖母が遠くへ行ってしまう予感がして不安だったから

問八 ④ ケヤキの大木に抱かれているように感じた。とあるが、その説明として適当なものはどれか。

- ア いつも自分に厳しく接し、威圧的に思える祖母の態度を例えている。
- イ 病気によって生気を失い、骨ばって冷たい感じのする祖母の姿を例えている。
- ウ 自分を守り、落ち着きと安心を与えてくれる祖母の存在を例えている。
- エ 周囲を見渡し、冷静に物事を見極めることができる祖母の性格を例えている。

問九 ⑤ すこし親ゆびが……コハゼをとめた。とあるが、その時の「ケン」の気持ちとして適当なものはどれか。

- ア 祖母が亡くなった今となっては、たびをはかずに怒られたことも良い思い出である。
- イ 祖母が生きている間はたびをはくことの意味がわからなかったが、今なら分かる。
- ウ 祖母がいつも気にかけていたたびをこれからははくことが、一番の恩返しになるだろう。
- エ 祖母の言うことはあまり聞くことがなかったが、これからは周囲の言葉に耳を傾けよう。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

殺生を禁止する定めがあった時代に、ある僧が母を養うため、仕方なく魚をつかまえて持ち帰ろうとしたが捕えられてしまった。

僧、涙を流して申すやう、「天下にこの制重きこと、皆うけたまはるところなり。制なくとも、法師の身にてこの振る舞ひ、さらにあるべきにあらず。ただし、吾、年老いたる母を保持り。ただ吾一人のほか、たのめる者なし。齡たけ身衰へて、朝夕の食ひ物たやすからず。吾また家貧しく財持たねば、心のことに養ふに力堪へず。中にも、魚なければ物を食はず。」と申す。

〔宇治拾遺物語〕から

問一

(1) (a) うけたまはる、(b) たのめるの本文中での意味はそれぞれどれか。うけたまはる

- ア 身にこたえている
イ 受けとめなさっている
ウ 聞いている
エ 承知申し上げている

(2) (b) たのめる

- ア 頼りにする
イ わがままを言える
ウ 世話がかかる
エ 期待する

問二

に入る語はどれか。
ア いと
イ たとひ
ウ あたかも
エ いかでか

問三

この振る舞ひ、……あらず。の解釈として最も適当なものはどれか。

- ア 法を守れないなど問題外である。
イ 親のことを考えるのは望ましくない。
ウ 殺生は絶対にしてはいけない。
エ 制裁を受けることなど例外である。

問四

力堪へず。の主語として適当なものはどれか。
ア 吾
イ 母
ウ 作者
エ これを聞く人々

問五

これを聞く人々、……なし。の理由として最も適当なものはどれか。

- ア 法律の非情さに腹が立ったから
イ 法師の家の貧しさに同情したから
ウ 自分の母親の安否が心配になったから
エ 親を思う法師の心に感心したから

四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

みなさんは、「グリム童話」や「イソップ寓話」^(注)を読んだり聞いたりして、よく知った日本の昔話にあまりによく似ているので、ふしぎな思いがしたことがあるのではないだろうか。遠いドイツの、片田舎^(a)の老婆が語ったメルヘンや紀元前に話されたギリシアの動物寓話が、なぜ日本の昔話にそっくりなのか。それはだれかが伝えたからなのか、それとも偶然⁽¹⁾に似ているのか。昔話のあやしい魅力の一つは、この国際的性格にある。

また、このように遠く⁽²⁾に遠く⁽²⁾に近いのが昔話である反面、近くて遠いのも昔話の文芸性であろうか。たとえば、日本列島と[]の対岸にある朝鮮半島では、日本の昔話にしばしば出てくるよい爺さんとよい婆さんの登場する「隣の爺型」^(b)の昔話はまったく聞かれない。代わってここでは心がけのよい弟と性悪な兄の、「兄弟葛藤型」^(c)の昔話なのである。(略)昔話学の重要な一分野で、多くの人が関心を寄せるその国際的比較研究は、このような昔話の文芸性を対象にしてなされる。

有名な、昔話のインド起源説も、その国際的比較研究がもたらした一つの学説であった。

(稲田浩二・稲田和子編「昔話ハンドブック」から)

(注) 寓話Ⅱ登場させた動物の対話・行動などに例を借り、生きるた

めの知恵を人々に伝える目的の話

問一 片田舎、隣、性悪の読みをひらがなで書きなさい。

問二 偶然の対義語を答えなさい。

問三 遠く⁽²⁾に遠く⁽²⁾に近い……であろうか。という一文の、文の種類を示した次の語の[]に適切な一字を入れなさい。

[] 文

問四 []には「きわめて近接している」という意味の四字熟語が入る。次にあげるその四字熟語の「ア」「イ」に入る漢字をそれぞれ答えなさい。

「ア」衣 「イ」水

問五 聞かれないを九字で書き変えなさい。

問六 ④もたらしの活用の種類を答えなさい。

